



リングワールド ふたたび *The Ringworld Engineers* (1980) ラ
ライ・ニーヴン (小隅
黎訳) 早川書房 (7/
15刊・¥1500)

SFの舞台設定は、広大であれば広大であるほどいい。太陽系規模、銀河系規模——しかし、虚無に星々が点在するだけ、というのも面白味に欠ける。できれば、無限に続く大地の連なりが望ましい。

現代SFの設定でベストを上げるなら、フ
ァーマーの『リバー・ワールド』や『階層宇
宙』と共に、やはり恒星を巡る輪の世界『リ
ング・ワールド』が入ってくるだろう。こと
設定から見ると、本書を凌ぐアイデアは、
そうそう出てくるまい。当然、反響も大きか
った。かくして、前作から、アメリカで九年
ぶり、翻訳では三年ぶり、物語の中では二十
三年ぶりに、リング・ワールドが再登場す
る。主人公ルイス・ウー、クジン人のハイミ
ーリ(話し手)は健在、あと、バベッティア
人は、ネサスから「至後者」に入れかわって
いる(大差はない)。軌道の安定が崩れ、破滅
寸前のリング・ワールドを救おうとする彼ら
……物語は、確かに楽しめる内容だ。ただ
(半ば予想通り)、今回も、設定を生かし切ると
ころまでは、いかなかったようだ。これは、
設定に壮大なアイデアのあるSFの大半に言
える。なにせ、広すぎる!

(俊)